
死にたいママと死にたいあたし

水広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたいママと死にたいあたし

【Nコード】

N6726U

【作者名】

水広

【あらすじ】

死にたいママと、死にたいあたし
どれだけ時間が進んでも
どこまで世界を進んでも
変わらない生と死の呪縛。

解き放たれたい？

それなら、ご自由に。

でも、忘れないで

その命は

過去から脈々と受け継がれてきたものだってことを。

あなたが生き抜くための酸素は
この世に満ちているから。

ママはあたしが幼い頃から、もし死ぬなら練炭自殺がラクよと言っていた。もしやるならママが服薬している睡眠薬を分けてあげるから、それをアルコールと一緒にたくさん飲み下したあと練炭に火をつければ眠っている間に逝けると教えてくれた。一度だけではない。ことあるごとに何度も何度もあたしに言っていた。それはまるで、あたしに死ぬと言っているように聞こえた。でもママはあたしのことをちゃんと愛していた。あたしを叩いたことは一度だってないし、ご飯も作ってくれる。洗濯だってする。母子家庭なので仕事にも行つて、家庭を支えていた。

ママは過去に何度も自殺を試みたことがあるらしい。

一番初めにやったのは首吊りだと言っていた。それを聞かされたのは、まだあたしが5歳のころだった。あたしがまだ生まれてないとき、男に見捨てられそうになったので男の目の前でアパートの二階のベランダから飛び降りたのだという。首には紐をくくりつけていて、柵に紐を縛っていた。勢いよく飛んだことと、紐が元々弱かったことと、当時のママの体重が60キロあったため、紐が千切れて一階に落下して終わった。

二回目は電車に飛び込むとした。男に見捨てられたすぐ後だった。けれど怖くて飛び込めず、終わった。

ママは昔からリストカットや薬の過剰摂取をしていた。二回目を断念してからは、ネットで心の中してくれる人を募った。けれどママはいつも騙されていた。心中の場に行っても毎回自殺するのは嘘で、男たちに無理矢理犯されていた。そうして何度目かのレイプであったしを妊娠した。だからあたしのパパはママを強姦した人で、誰なの

かは全くわからない。

あたしが色々考えられるようになってくると、どうしてあたしを産んでしまったのか疑問だった。それを訊ねると、ママはこう言った。

「産んでみるのも面白そうだったから。どうせママはそのうち死ぬ気だったし」

今もママは死にたいと思っている。けれどあたしを産んだせいでもなかなか死ぬきっかけが掴めずにいる。騙されて強姦されたときの子供だけど、いざ産まれて育ててみるとあたしが可愛いようで、あたしを残しては逝けない。ママは口癖のようにそう言っていた。

ママはあたしに死んでほしいの？ そう訊ねると、ママは首を傾げる。わからない、と言う。

「けれど確実に言えることは、あなたが死んだらママもすんなり逝けるから」

そんなふうに言われたら、あたしだって自殺はできない。ママを殺したくないからいつだって死ねなかった。

2

ママはあたしの目の前で腕を切ることがよくある。初めにそれを目の当たりにしたとき、あたしは叫び声をあげた。元々叫ぶように泣いていたけれど。

あたしがCMでやっている可愛いお人形が欲しいというと、家にはそんなものを買う余裕がない、とママは言った。どうしても欲しいと駄々をこねて泣き出すと、ママはリストカットをしたのだった。「ママの稼ぎが少なくてごめんね。ごめんね、ごめんね」

そう言いながらママは腕を何度も切った。あたしは必死で謝り返した。ごめんなさい、ごめんなさい、二度と我が儘は言わないから、

と。それからママはたくさんの薬を飲んで眠ったのだった。

それを目にしてから、あたしも腕を切るようになった。8歳のことだった。学校で先生に叱られたり、友達に迷惑をかけてしまったりしたときに腕を切った。幼心で自分を切り刻むことが謝罪のしかたなのだと認識していた。腕を切ると先生は絶叫した。友達も叫んでいた。あたしの前からはすぐに友達が居なくなつて、先生はあたしに対応しきれなくてノイローゼになり学校を去つていった。次から担任になる先生は、あたしを徹底的に無視していた。たとえ腕を切つてみせても知らない顔をされていた。なんの反応もしてもらえないのが虚しくなつたので余計死にたくなつて、授業中に学校のベランダから飛び降りた。でも場所が二階だったことと、下は芝生だったので打撲程度で済んだ。これをきっかけに、スクールカウンセラーの先生があたしの家に来るようになった。

カウンセラーの先生は若くてかつこい男の人だった。ママが先生のことを氣に入つてしまい、一生懸命あたしたちのことをなんとかしようとする先生を一生懸命ママが誘惑した。先生はその度に頑なに断つていたけれど、いつしか心は折れてママと先生がセックスするようになった。それからカウンセリングどころじゃなくなつて、先生が毎回来るたびにただセックスをするだけとなつた。

でも、効果は色々とあつた。ママはリス力をしなくなつた。精神も少しだけ安定した。セックスが始まるとあたしはのけ者にされて嫌だつたけど、ママの調子がよくなるのならと、先生が来るときは氣を利かせて家を出て、公園などで時間を潰した。

しかしその安定は長く続かなかつた。

あたしは現場を見ていないので詳しくはわからないが、先生がママとのセックスを拒んだ。これ以上こんな関係が続けてはいけないと言つたらしい。ママはブチ切れてナイフを振り回した。ナイフで脅しながら先生を遠ざけ、首にロープを巻きつけてベランダから飛び降りた。すぐに先生がロープを切り、ママは二階から一階に落ちて助かつた。それから、先生は家に来なくなつたのだった。

ママは先生に見捨てられたのが悲しくて毎夜泣いた。お酒をいっぱい飲んで、溜め込んだ薬をたくさん飲んで寝まくった。ときにあたしも付き合ってお酒を飲んだ。ママを励まし、なだめた。そうやってママのことを労ると、必ずママはあたしを褒めてくれる。

「あなたは強姦されたときに出来た子供だけれど、あなたを産んでよかったわ。おろしてたらきつとママも死んでた。でもあなたを見るたびにレイプされたときのことを思い出すから、実は複雑なのよね。はあ……」

ママは大概そうやって言った。

3

自分の存在意義を見出したかった。

だから、いつからかを境に家のことはほとんどあたしがするようになった。ママには働いてもらっているのだし、あたしの居る意味を根付かせたかったので頑張ってママを支えた。ママにもっともとあたしを認めてもらいたかった。

それと、あたしを傍で認めてくれる人が欲しかったので、小学校五年生のときに、好きだった同級生の男の子に告白をした。すると、

「お前、腕切ったり、死のうとするだろ……。怖くてそんなやつと付き合えないよ」

そう言われた。目茶苦茶ショックだった。自分の何もかもを否定されたようだった。好きだと想いを寄せていた人に否定されることが死ぬほど辛いことだとは思っても寄らなかつた。

「ママ……死にたい」

ママが帰ってくると玄関先でそう告げた。買い物袋を両手に持つ

たママは軽く二度うなずき、奥へ進んで台所のテーブルに荷物を置くと、ママの部屋にあたしを招き入れた。押入れから七輪と練炭を取り出し、あたしにガムテープを持ってくるようにいった。ガムテープを持ってママの部屋に入ると、たくさんのお薬がテーブルの上に置かれていた。お酒も置いてあった。

「練炭の煙が漏れないようにガムテープで隙間を埋めなさい」

ママはそう言って、練炭を七輪にセットする。あたしは戸惑った。確かに死にたいほど傷ついたのだけど、どちらかというとあたしの胸中を察してほしかったから死にたいと零しただけだったので、いざ本気で自殺しようとなると恐ろしくなった。それに、どうやらママも一緒に死ぬようなので、それも嫌だった。

「ママも死ぬの？」

一応訊いてみると、当たり前じゃないの、と言ってママは笑った。「あなたのために生きてるようなものなんだから、あなたが死にたいのならママも死ぬわよ」

そう言いながらママはいそいそと自殺環境を整えていった。あたしは首を横に振った。

「なに？ 首なんか振って。言いたいことがあるなら遠慮なく言いなさい。どうせ今から死ぬんだから」

突如、涙が溢れてきた。喪失感やママと離れ離れになる悲しみ、何もかもが消えゆくような感覚が身に降りかかってきて、どうしようもない気持ちになった。あたしは声をあげた。ママと生きたい、ママと生きたい。その言葉を繰り返して泣いた。

「あら、気が変わっちゃったの。それは残念」

それだけ言って、ママは七輪などをちゃっちゃと片付けていった。その日の夜はママと一緒にお酒と睡眠薬を飲んで、一緒に布団で寄り添って眠った。数日眠り続けた。

中学二年生の夏、あたしに初カレが出来た。街でナンパされた。相手は19の大学生だった。

彼はあたしの存在意義を満たしてくれた。ようやく誇りをもって生きられる居場所を見つけたあたしは、何もかもを彼に捧げ、尽くした。お金が欲しいというから年齢を偽ってキャバクラで働いた。あたしはそこそこの人気が出て、いっぱいお金を稼いだ。家に生活費を入れて、彼に貢いだ。生きている心地がした。

しかし、この幸せは長く続かなかった。

あたしが働いていたキャバクラが摘発された。中学三年の夏のことだった。それであたしは警察に捕まり、学校に連絡がいった。あたしは先生たちにつまらない説教をされた。ママにももちろん連絡がいったけれど、ママは先生たちの言葉を聞き流していた。

「ママは確か十五のときにキャバクラで働いていたわ。あなたは十三でやるんだから、私より偉いわね」

ママがあたしに言ったのはそれだけだった。

また違うキャバクラで働きたかったけれど、先生の監視がつくようになって働けなかった。彼に貢げなくなつて、いつしかあたしは愛想を尽かされるようになった。あたしが高校にあがる頃、彼に2歳の新しい彼女が出来て、突然別れを告げられた。

「ママ……死にたい」

何もかもを失ったあたしは帰ってきたママにそう告げた。今回は前より本気だった。買い物袋を両手に持ったママは軽く二度うなずき、奥へ進んで台所のテーブルに荷物を置くと、ママの部屋にあたしを招き入れた。押入れから、すでに練炭がセットされている七輪を取り出し、あたしにガムテープを持ってくるようにいった。ガムテープを持ってママの部屋に入ると、たくさんのお菓子がテーブルの

上に置かれていた。お酒も置いてあった。

「どうするかは覚えてるわよね？ 煙が漏れないようにガムテープで隙間を埋めるのよ」

ママはそう言つて、いそいそと自殺環境を整えていく。

「やっぱりママも死ぬの？」

一応訊いてみると、当然よと言つてママは薄っすら笑つた。

「あなたが死んだらママに生きる意味はないし」

ママはグラスにあたしとママの分のお酒を注いだ。その時点でもうあたしは泣いていた。首を横に振っていた。

「なに？ 泣いて首なんか振つて。もしかして怖くなっちゃったの？」

あたしは目元を拭いながら首を傾げた。

「よくわからない……でもまだママと生きたい……」

そう、と言つてママはお酒を一口飲む。

「どうするの？」

あたしは、「やっぱりやめる、ごめんねママ」と言った。

「それは残念。ママは夕飯作るから、これは片付けておいてね。間違つても私が夕飯を作つてる間に練炭自殺しちゃ駄目よ」

あたしは泣きながらうなずいて、ママはさつさと部屋を出て行った。

その日の夜、二人でお酒を飲んで多めの睡眠薬を飲んだあと、ママの布団に入らせてもらった。真つ暗な部屋のなか、あたしはママに聞いたかったことを聞いた。

「ママはあたしを産んだこと、今は後悔してる？」

半分くらい、とママは答えた。

「ママはやっぱり今でも死にたい？」

もちろん、とママは答えた。ママは今でも時々腕を切っている。それを見つけると、あたしはいつもそつとママの腕の血を拭いていた。あたしが腕を切ると、ママもそうしてくれる。

「ねえ、ママはどうしてそんなに死にたいの？」

つまらないからよ、とママは言った。

何も面白くない。生きている意味がわからない。どうせ最終的に死ぬ。いつでも死ねる選択ができて、簡単に生を放棄できるのにも拘わらず何故色んなストレスを抱えながら生きなきゃいけないのか考えてしまうと馬鹿らしくなる。だいたい、後は老いて外見がみすばらしくなっていく一方だし、そのうち男は全くよりつかなくなる。ママにとって生は絶望。死が希望。ただそれだけよ、とママはゆったりした口調であたしに説明してくれた。

でも、それってママが死にたい根本の理由には思えない。あたしはさらに問いただした。ママの死にたい理由の根本を。

「それはね、たぶん……ママがはつきりと望まれて誕生した人じゃないからよ」

あたしは、なんとなく予感がした。もしかしたら、あたしと同じような理由でママが産まれたのではないかと。

「ママのことを深く知りたい？」

静かな声でママは言った。聞いちゃいけないような気がしたけれど、ここまで踏み込んだらもう引き返せない。あたしは、話を聞いた。するとあたしの想定を容易く凌駕する事実が飛び出した。醜く、おぞましく、生に絶望を抱く理由を思い知らされる内容だった。

ママの父親——つまりあたしの祖父にあたる男は、殺人犯。男が殺したのは祖母の一家だった。祖母の家に強盗として押し入った男は家族と鉢合わせてしまい一家三人を惨殺。祖母だけは殺さずに生かしてその場で強姦した。それでママを妊娠したのだった。男は捕まって死刑となった。執行はされたので、もうこの世にはいない。

何故祖母はママをおろさず産んだのか。その理由は、ママにはわからないらしい。祖母はママを5歳まで育てたあと自殺をしてこの世を去った。それからママは施設に入って暮らした。

「お母さんが私を産んだ理由を、知りたかった」

だからあたしをおろさなかった。それが、あたしを産んだ本当の

理由だった。

「それでママは……おばあちゃんがママを産んだ理由、わかったの？」

この質問にママは首を横に振った。

「ただ、もしかするとママのお母さんはもう死ぬ気だったのかもしれない。みんな殺されちゃったし、後を追う覚悟ができてたのかもね。でも妊娠してることに気付いて……殺人者の子供だけれど、新しい生命にはなんの罪もないのだし——だから殺さずに産んで、あの程度は育ててくれたのかな」

お腹の子供を殺す行為が、殺人者の行いと被ってしまつて嫌悪したのかもしれない。祖母は自分の家族の死体を目の前にしながら犯された。死にたくなる絶望感やトラウマを負わされたに違いない。それでも、みごもつたママをおろせず、自分の家族を殺した人間の子を産んだ。考えただけで恐ろしい。でもそのおかげで、今のあたしが存在している。

「あなたは関係がないから、気にしちゃだめよ」

ママはあたしにそう言ってくれた。けれど気にしないなんて無理だ。あたしは産まれてはいけない子供だった。おぞましい罪の証だった。この世の酸素を吸ってはいけないような気がしてきた。

「でも、どうしても耐えられなくなったらママに言いなさいよ。いつでも死ぬる準備は整ってるから」

あたしは、とんでもない条件下で生まれてきたと思う。それはママだって同じ。苦しみながら生きつづけてママも祖母と同じく強姦され、あたしを孕まされて出産し、今日まで共に生きてきた。

死にたい、というより消えたい。けれどあたしが居なくなるとママも死ぬ。それがどうしても堪え難い。だからあたしは生きないといけない。この禍々しい絶望的な世界で。半強制的に。

ママの出生を聞いてからというものの、あたしの心は急速に黒ずんで腐っていった。心の調子が悪くなるとママのお薬を勝手に飲んでいたけれど、いよいよあたしにも精神科医が必要になった。ママが通っているメンタルクリニックに通うようになった。

高校には無事進学したのだけど、ほとんど行けなかった。学校生活には全く馴染めず、行く意味を見出せない。しかし高校を出ないとまともな就職はできない。ママ自身高校を出ていないので、この世を生きつづけるならせめて高校くらいでなさいよ、とママは口癖のように言っていた。大学を出たらもつといいけれど、ママは稼ぎが少ないから大学に行く場合はある程度自分でなんとかしなさいよ、とも言っていた。あたしが休みがちなのを知ると、行く気がなくてもし死ぬ気なら早めに言いなさい、とも言っていた。

ママはあたしの存在を少しばかり嫌悪している。嫌悪しながらも、自分とあたしのために働いて、高校へもいかせてくれる。この先胸を張って生きつづけられる自信はないけれど、出来ることならママに恩返しを試みたくったのでまず頑張って高校を卒業してみようと、目標を置いた。平行してまたキャバクラで働こうと思った。風俗も考えたけれど、見知らぬ不特定多数の男と肌を重ねることを想像すると気持ちが悪くなってくる。一応でもママはあたしを大切に育ててくれたし、あたしもあたしなりに自分を大切にしてきた。金で性の安売りがなんてしたくない。存在にプライドを持ちたかった。身体の関係は選ぶ側でいたかった。

年齢を偽ってキャバクラの仕事に就いた。やってくるお客にはヘンなことをしてくる人や、結局はあたしとやりたがっている人ばかり。いいな、と思う男は居るけれど、お客と付き合う気にはなれなかった。客は客だと割り切っていた。つまり、キャバクラにやってくる相手は全員対象外。相手がお金持ちでも、あたしはいくら搾り

取れるかを常に考えて行動していた。身体を求められると必ず引いた。

そうやって上手くやりながらお客についていくことはなかったけど、街でかっこいい人にナンパされてついていくことは何度かあった。付き合ってみることもあるが、蓋を開ければナルシストや頭の悪い男ばかり。あたしのことをちっともわかってくれない。愛してくれてもそれは上辺で、自分のことしか考えてないやつばかりだった。男の場数を踏んでいくうちに、最初に付き合った19の大学生もとんでもない駄目男だったんだと気付かされた。

「ねえママ。もしかしてこの世にはロクな男がいないの？」

夜、ママとお酒を飲んでいるときにそう質問した。ママは鼻で笑った。

「あなたまだ16でしょ？ その歳でそれに気付くなんて、中々賢いわねえ」

褒めてもらえて、あたしは嬉しかった。ママは今まで付き合ってきた男の話をしてくれた。依存できるものなら徹底的に寄生するヒモ男、自分に何も誇れるものがなくて苛立つとりあえず殴る蹴るの暴行を加える薄っぺらなDV男、自分が世界一かっこいいと思っている不細工なナルシスト男、自分の頭の悪さを言い訳にすぐには謝って何も理解しようとしなないごめんね男。ママが首吊り自殺をしようとしたときの男は、付き合ってきたなかで一番まともな極普通の男だという。けれど普通すぎてママの精神構造についていけず、別れを切り出されたのだった。その相手はママが逆ナンパしてつかまえたらしい。

「言い寄ってくる男は大概ロクな奴じゃないわよ。言い寄ってこない男のほうが、純粹で真面目な場合が多いのよ」

なるほど。確かにそうだと思う。純粹で真面目だから、言い寄ることができない。そういう男のほうが人を大切にする傾向にある、とママは分析する。

「向かってくる男は安物。自分の欲望を押し付けたがってるだけだから。いとおしそうに遠くから見つめてくれる男のほうが上物よ。そういう男は女を愛したがつてる。包容力がある。ママは色んな経験をしてそれがわかったわ。今度、そういう男を見かけたら一度胸に飛び込んでみなさいよ。それで飽きたら上手くママに回してちょうだい」

あたしは笑って、「わかったよママ」と返事をした。

6

自分から声をかけたことなど、一度もない。あのひとは優しいそうだな、と思いながらすれ違うことはよくあった。その優しいそうな男たちは絶対に声をかけてこない。

学校を休んで、キャバクラの出勤前に街で男を漁った。声をかけてくる奴は全員無視。そうじゃなくて、あたしをじっと見つめてきて真面目で純粹そうな男を探した。ひと気の多い場所にいけばそんな人はすぐに見つかる。選り取り見取りだった。

しかし、いざ声をかけようと思うと緊張してしまう。簡単だと想像していたけど、実際に男を目の前にすると、なんて話しかけて仲良くなればいいのかわからなかった。あたしを見てくれる良い男を見つけても、髪に触れて流し目をするだけで精一杯。

「ママ……いいひとを見つけても自分から声をかけるのは難しいよ」
晩酌をしながら、あたしはママに相談した。ママはそれが普通よと言った。

「軽々しくナンパできる人はちょっと頭がおかしいのよ。あなたはまともだからできないの」

まとも、という言葉は疑問だった。自分がまともとはちっとも

思えなかったから。それを口にすると、

「ママよりは数百倍まともよ」

そう言ってくれた。あたしは首を横に振って、ママもあたしも同じくらいまともじゃないよと笑いながら言った。ママも笑ってくれた。

「声をかけてこないイイ男に声をかけてみたいなあ。ママ、何か上手い方法ない？」

ママはグラスのお酒を飲み干してあたしを見据える。

「じゃあこうしましょう。今度街へ行つてあなたが男に声をかけられなかったら、そのときはママと心中する。練炭自殺で」

やはり、こんなことを言う人がまともなわけがない。

「わかったよ、ママ」

そうして、こんなふうになんて軽く承諾するあたしもまともなわけがなかった。

7

男をつかまえられなかったら自殺するということ、それを意識しているとあたしの中に掛かっていた制御がすんなり外れた。電車を降りて広い駅の構内で、目鼻立ちのよい黒髪の真面目で純粹そうな男を見つけ、その人としつかり目が合ったので胸に飛び込むつもりで向かっていった——というか、本当に飛び込んだ。古臭いような手口だけれど、よろっと身体のバランスを崩して足をふらつかせて男の胸にぶつかった。

「あつ、……ごめんなさい」

さもすまなさそうに言ってみせると、男は戸惑いながらも「大丈夫ですか？」と気遣ってくれた。あたしは胸を押さえて弱々しく笑いかけ、大丈夫ですと言いつつ大丈夫ではなさそうな演技をする。

「本当に大丈夫ですか？」男は愛想よく笑う。それから、心配そうな顔をする。「調子が悪そうにも見えるけど……」

この時点で、あたしの直感は言っていた。男はかなりの上物だ。「ちよつとだけ、調子が悪くなっちゃって……。人混みが苦手なんですよ、人間がいつぱいいるとあたし、時々気分が悪くなる」

男は口を開けて「あゝ」と共感しつつうなずいていた。

「その気持ち、わかりますよ。俺もそうですから」男は自分の胸をぽんぽんと叩く。それから、何かを考えるように眉間に皺を寄せながら適当な空間に視線をさまよわせ、その目があたしに合う。「ここからちよつと行くと緑地公園があるんですけど……駄目そうだったらそこまで一緒に行きましょうか？ 木陰で休んでれば、ちよつとは症状が軽くなると思いますから。どうします？」

当然、そこまで一緒に行くことを選択した。移動中、彼はずっとあたしの顔を窺ってくれていた。

目的地についてあたしが木陰のベンチに座り込むと、彼は飲み物を買ってこようかと訊ねてきた。それを断ってみせても、もしかしたら熱にやられたのかもしれないからスポーツ飲料でも買ってくるよと言って気遣ってくれた。嘘みたいなくらい優しすぎる男だった。あたしは逆に不安になってしまう。飲み物を買うに行くと言いつつ戻ってこないかもしれない。結局はあたしとやりたがっているのかもしれない。会話しているうちにいつの間にか怪しげな商品を勧められるかもしれない。自分から向かっていったくせに、あたしは勝手に色々と考えて危惧していた。とりあえず、飲み物を買うに行くと言って戻ってこなかったら、というケースを考えてあたしも付いていくと言った。だって今見捨てられたら、確実にあたしの自殺願望は膨らんで今日の夜お母さんと心中を果たしてしまいそうな気がしたから。

付いていこうとしたのだが、男は強い口調で待つてくださいますって言った。ここで休んでくださいと念を押された。あたしは不安になりながらも、強く言われたので仕方なく待った。

三十秒ほど経つと、さらに不安が募ってくる。一分が経過しても、彼は戻ってこない。見捨てられたのではないかと過ぎり、身体が震えてきた。あれを絶対に失いたくない。あれはあたしをいっぱい心配して気遣ってくれて優しくしてくれるから。

一分三十秒ほど経った。彼の姿は見えない。あたしはバッグに手をつ突っ込んでナイフの柄を握り締める。腕を切る自分を想像しまくった。

合計二分が経過する。腕を切ろうと決めた矢先、ようやくあれの姿が見えた。ペットボトルを二本持っている。あたしは極めて冷静でいようと言い聞かせ、取り出そうとしたナイフを放した。気分悪そうな顔をした。彼が傍までやってくる。

「ずいぶん、遠くまで買いに行ったね」

「え？ 全然」彼は首を振る。「すぐそのコンビニで買ってきたんだよ」

ここからは見えないが、そういえば来る途中にコンビニがあつたことを思い出した。彼は「はい、どうぞ」とペットボトルをあたしに差し出す。お礼を言っ受取り、フタを開けて一口飲んだ。

「やっぱり喉渴いてた？」

いきなりそう言われる。よく見たら、一口のつもりが半分ほど飲み干していたことに気付いた。実はかなり動揺して緊張していたので、それで飲み物を欲していた。渴いてましたと返事をし、あたしはバッグから財布を取り出す。

「いくらでした？」

そう訊ねると、何故か男は軽く笑う。

「こっちから押し付けておいて、お金取る気なんてないよ」

男は飲み物を飲む。あたしはその姿をぼんやり見つめる。胸中ではこの優しい男をどうつかまえようか、必死で算段を立てていた。

「気分はどう？」男はペットボトルのフタを閉める。

「ほんの少し、よくなりました」

「そう。ならよかった」

男は柔らかな笑顔をみせてくれる。あたしの胸はきゅんと締め付けられて、顔に熱がこみ上げてきた。声をかけてこない男たちのなかにはこんな良い男がごろごろといるのだろうか？ それとも、あたしは大当たりを引いたのだろうか。

不意にメロディーが鳴る。あ、と男は呟き、ポケットを探った。男の携帯が鳴っているようだ。携帯を出すと男は操作を始めた。メールを受信したらしい。

今が絶好のタイミングに思えた。あたしもさりげなく携帯を出す。一先ず、男から連絡先などを聞いてくれるのを待ってみる。このあとの予定を聞いてくれたら尚良い。あたしはどこまでも付いていく気でいた。当日欠勤は罰金を払わされることになるが、この男のためならそれは構わない。

「じゃあ、俺はもう行くから」

「へっ？」

急に突き放されてしまう。呆気に取られた。

「駅で待ち合わせしてたんだよ」

男は駅の方を指して言う。あたしは、あたしのために尽くして良くしてもらっていたことで、とある可能性をすっかり忘れていた。怖くて聞きたくないけれど、喉の奥から言葉を押し出す。

「……彼女とか？」

男は小さく笑い、どこか恥ずかしそうに頭を掻く。

「まあ、そんなところだよ」

グラッ、と身体が揺らいだ——気がした。実際には身動き一つしていない。けれど強烈な喪失感に襲われて、大事な部分が一気に持っていってしまった感じがした。目の前が真っ白になりかけた。無意識にあたしは愛想笑いを浮かべて「ああそうなんだ」と返していた。男が何かを言っている。なんだか優しそうな言葉をあたしにかけている気がする。そうして手を振られ、あたしはほとんど無意識に小さく手を振り返して、視界から男が消えていった。

茫然自失。男が居なくなっても、ずっと手を振っている。唇が震

える。涙がこみ上げる。三十秒ほど経つても、手の振りは止まらない。数メートル先でチャラそうな茶髪の男があたしを指差す。隣には黒髪の小柄な男がいる。茶髪の男があたしに向かつて手を振っている。その姿が視界に入っているけれど、あたしは何がなんだかよくわからなくなっていたのでまだ手を振っていた。二人の男はあたしの傍まで来て、黒髪の男がたどたどしい口調で何かを言う。あたしは無意識に適当な相槌を打つ。茶髪の男が軽々しい口調で話しかけてくる。連絡先を教えてくださいと言われたので手に持っている携帯を渡した。黒髪の男がやったあ、と喜ぶ。携帯が返却されると、これから暇かどうかを訊ねられる。あたしはぼんやり遠くのほうを見つめながらうなずいた。茶髪の男があたしの腕をつかんで引く張ってくる。引く張られるがままあたしは歩く。いつの間にかカラオケボックスに入っていた。男たちが歌う。あたしは茫然としつづける。ヘンな女、と言われた。それから茶髪の男があたしの身体を触りだす。黒髪の男がそんなことをしていいのかと茶髪に言う。いいんだよ、どうせクスリでもやってておかしくなってるんだろ。そんな言葉が聞こえる。いつの間にかショートパンツも下着も脱がされていて、茶髪の性器とあたしの性器が繋がっていた。茶髪がイクと、お前もやれよと黒髪に言う。黒髪もあたしに性器を挿入してくる。黒髪の部分だけはさきほどの男と同じなので、彼としている自分を思い浮かべていた。するとほんの少しだけ身体は感じた。

「ママ、死にたい」

ママが帰ってくると玄関先でそう告げた。レイプされたあのこととはほとんど覚えていない。どうやって帰ってきたのか思い出せない。電車に乗りながら、電車に飛び込んで死のうかどうかを迷って

いたのはなんとなく覚えている。買い物袋を片手に持ったママはあたしをじっと見つめたあと、三回うなずいた。あたしはすでにガムテープを握り締めていた。

部屋の隙間をガムテープで埋めたあと、ママと一緒にお酒で睡眠薬をたくさんに飲み下す。眠くなってくるとママが練炭に火をつけて、布団に入った。一酸化炭素が部屋に充満してくる。終始、無言だった。

「ママ」

寄り添って横になっているママに呼びかける。お別れを言いたかった。ママは「なに？」と問い返す。

「ありがとう」

ママはじつとあたしを見つめる。無表情だった。

あたしは、瞼を閉じていく。

「ありがとう……」

瞼を閉じきる寸前で、ママの小さな声が聞こえた。重くなってくる意識に抗って、瞼を開く。

「いま、ありがとうって言った？」

ママはゆっくりとうなずく。それから、微かな笑みを浮かべた。

「娘が心中してくれるなんて、ママは幸せ者よ」

あたしも微かな笑みを浮かべた。

「ママ、最後にお願ひがある」

「なに？ どうせもうすぐ死ぬんだから、何でも言いなさい」

あたしはゆっくりとうなずく。

「頭を撫でてほしい」

意外な言葉だったのか、ママは若干目を見開いて、眉を上げた。撫でてほしい」

もう一度言ってみせるとママは真顔に戻り、手をゆっくりと動かした。その手が、あたしの頭に乗る。あたしが目を閉じると、ママは撫でてくれた。とても、心地好い。

「もうひとつ、我が儘を言っていいい？」

目を閉じたまま言った。「なに？」という返事が聞こえる。意識が、閉じていく。

「ママの胸の中で死にたい」

それは、自分では言えたかどうか知らなかった。口を開いて言葉を発したような気がした。はっきりと伝えたいのもう一度言いたかったのだけれど、思いとは裏腹に、声を出せない。もう抗えそうになかった。

柔らかな何かが顔にあたる。全身が、包まれる。そんな気がした。ママがあたしを抱きしめてくれている、という想像をしながら、幸せを噛みしめつつ身体の力を抜いた。多分、あたしは涙を零した。零しているかどうかはわからないけれど、心のなかは泣いていた。最後に愛情や幸福感を味わえてよかった。手放すのが惜しいけれどももう終わらしいので、ママの愛に向かってさようならを告げた。

遙か彼方で、ガシャン、という物音が聞こえた——気がした。

エピローグ

白いものが映る。

真っ白だ。天国だろうか。というか、天国が本当にあったんだ。

視界に人の姿が映る。天国の案内人だろうか。ナースっぽい服を着た女の人だった。あたしに向かって何かを言っているけど、よくわからない。身体に力が宿るまで、移動は待つてほしい。

「……き、みき——」

聞き覚えのある言葉。聞き覚えのある声。何度も何度も聞こえる。意識がはつきりしてくるにつれ、あたしを呼んでいるんだと気付いた。

顔を、左側に向ける。

「未希！」

視線の先に、ママが居た。離れたベッドに横たわっていた。ママは何度も何度もあたしの名を呼んで、泣いている。ナースっぽい服を着た女の人が先生を呼びに行くと言ってあたしの傍を離れていった。天国には先生も居るんだ、とわけのわからないことを思考した次の瞬間に、ようやく事態を理解した。

「死ななかったの？」

ママはうなずき、ついやってしまったの、と言った。

ママはずっと前から薬を飲んでいたので、習慣性がついていた。効くのが遅く、効果の出方もあたしより鈍い。あたしの頭を撫で、抱きしめながら、薄れゆく意識の中で激しい危機感を抱いてしまった。それは、母としての本能だと言う。あたしと共に絶対死ぬ気でいたのだけれど、身体が動いてしまった。子を守ろうとする本能の赴くままに。

「咄嗟に七輪を窓に向かって投げたの。窓ガラスが割れて、それでもすぐに煙は引かなくて……私も気を失いかけてたから、なんとか救急車を呼んだわ。それからのことは思い出せない。多分、そこで意識が切れたんだと思う。気付いたら病院に居て、布団に居たあたがちゃんと隣のベッドに居た……ママ、すごく安心したのよ……死ぬはずだったのに……」

ママひとりなら潔く死んでいた、ちゃんと死ねた——と、どこか悔しそうにママはそう呟いていた。

ママが医者と適当な会話を交わし、医者が出て行くと、しんと静まり返った。二人部屋なのでママとあたし以外は誰も居ない。ママはあたしに背を向けて、窓の方向を見ているようだった。あたしはそんなママの頭を見つめていた。無言が五分ほど続いたあと、あたしは思っていた言葉を口にする。

「ママ……ありがとう」

死にたかったけれど、ママが必死になってあたしの命を守ってく

れたことを思うと、自然と感謝の気持ちが湧いた。ママは背を向け続け、何も言ってはくれない。

「ママ、愛してる」

それは今まで一度も言ったことのない言葉だった。けれど、胸の中にはいつでもずっと溜まっていた。言いたくても言いづらかった。「ママは複雑よ……」

弱々しい口調でそう言われた。ママを死なせてあげられなかった罪悪感があたしを責める。

「だけど」

と、そこでママの言葉が止まった。なんだろう？ と、あたしはママの言葉を待ち続ける。

「……あなたが居てくれてよかったって思ってる」

あたしの口元が緩んだ。一瞬にして、これまで送ってきた人生が思い返された。

「あたしも実は複雑……」涙声になる。「でも……ママに産んでもらえてよかったって思ってるよ」

離れた位置で、涙をすすする音が聞こえる。そう、とママは呟いた。窓の外からは赤色の光が射し込んでいて、部屋は真っ赤に染まっていた。もちろん、光は窓の外に見える太陽が発している。朝陽だろうか？ 夕陽だろうか。全くもってそれはわからないけれど、綺麗だと思った。

「ママ」

ママの手が動く。顔を拭っているようにみえる。ママは返事をしてくれないけれど、構わずあたしは訊いた。

「まだ、死にたい？」

ママはゆっくりと溜め息を吐く。それから、うなずいたのが見て取れた。

「そっか」

ちよっとだけ、悲しい。そう思うのは、自責の念に対する言い訳かもしれない。

「でも」

と、そこでママの言葉が止まった。なんだろう？ と、あたしはママの言葉を待ち続ける。

「未希が生きてる限り、死ねない」

背を向けたまま、そう言い放たれた。口調は少し強かった。

それはどっちなんだろう？ あたしに死ねと言っているのか、あたしに死なないでと言っているのか。訊いてみようかどうか、迷ってしまう。

「あなたは死にたい？」

訊こうとして、ママの質問が飛んできた。あたしは小さく「うん」と返事をした。

「でも、ママが生きてるから死ねない」

ママが寝返りを打つ。あたしと目を合わせた。

「じゃあママが死んだら死ぬ？」

「死ぬけど……ママに死んでほしくない」

正直な気持ちを言ってみせた。

「そう……。それなら簡単よ、あなたが死ななければいいだけ」

ママは無表情だった。気持ちを量り知ることはいできない。

「あたしは生きるしかないね」

「そんなことないわよ？ いつだって死ぬのはあなたの自由なんだから。ママのことは気にせず、死にたいときはちゃんと死になさい」
そうして、ママも死ぬ。

「ふっ——」

どうしてか、あたしは笑ってしまった。

「なんで笑ったの？」

「うっん」

やっぱりあたしはママが好きだ。ママを愛してる。

あたしさえ生きていればママも生きつづける。あたしが死ねばママも死ぬ。ママはひとりで勝手に死ぬことはない。決して死を咎めず、あたしの生も咎めず、ママは若干嫌悪しているあたしをここま

で育ててくれた。そこに、強烈なママの愛情を感じることができる。あたしは死にたいけれど、生きたい。生きることがママへの恩返しになるような気がするから。ママの生を繋ぎつづけたい。ママの愛を感じつづけたい。ママを愛し続けたい。

あたしたちが生きていくための酸素は充分にあるから、もうちょっとだけこの世界で二人一緒に、息を吸っていたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6726u/>

死にたいママと死にたいあたし

2011年11月13日09時18分発行